

— 論文 —

神事に見られる雪室 ——秋田県横手市大森町波宇志別神社を事例として——

後藤麻衣子

A Yukimuro of making Religious Services

— An example of Haushiwake shrine in Omori, Yokote city, Akita prefecture —

Maiko Goto

In a paper, we considered a meaning of Yukimuro by solving an actual situation of Oshiaishinji and Yukimuro. We made clear change of Oshiaishinji and Yukimuro. Oshiaishinji was religious services that many people in the south part of Akita Prefecture took part. A visitor to a Haushiwake shrine took seriously part in Oshiaishinji. We guessed that shinji was done reception, because the them occupation is agriculture. Therefore, shinji of divining a good harvest or a bad it was important event. But Oshiaishinji was not done splendidly after the Second World War, because main occupation was not agriculture.

Yukimuro in Oshiaishinji was place to shut themselves up before Oshiaishinji was more form, also Yukimuro was not made, because people don't understand the important event that divining a good harvest or a bad it.

1. はじめに

秋田県横手市大森町に保呂羽山波宇志別神社が鎮座しており、秋田県南部地方を中心に広範囲にわたって信仰されてきた。その神社の年中行事の中に押合神事があった。押合神事は年初めの行事として重要であり、県南の多くの者が押合神事に参加し、その時に雪室¹⁾を作製していた。保呂羽山の雪室についてはこれまで注目されることがなく、本格的な研究は皆無に等し

い。以下に示す論文においても雪室の実態解明はほとんどなされていない。

宮崎進はカマクラ²⁾の語源はカミクラであると主張した。その理由を裏付けるために押合神事を例に挙げている。「正月五日の押合神事（五日堂とも）に参加する人達は、前日に登山し、夜は数百の雪むろを作り、その中に籠つて夜を明かす風があつた³⁾」と神事の前に雪室の中に籠っていたことを記している。宮崎は「雪

1) 雪室とは、雪山に穴を開けて中に人が入れるものや、雪で囲みを作り、上に木を渡し、簷などで屋根をかけたものを言う（後藤麻衣子「江戸時代後期の雪室—長岡と塩沢の雪室を中心として—」『昭和女子大学文化史研究』第9号、2005年、51頁）。

2) カマクラには二つの意味がある。1つは雪室の一つとしてのカマクラと小正月行事の総称を指す名称としてのカマクラである。

3) 宮崎進「かまぐらの語源と歴史」『出羽路』第4号、1961年、22頁。

むろに物忌の籠りがあり、また権五郎を祀った伝承は、雪むろが臨時的な祭場、つまりカミクラとなつた推定を導き出すようである⁴⁾と考えている。

だが、宮崎が例に挙げた押合神事に関しては上述した引用部分のみであり、詳細なことは不明である。雪室が参拝者にとってどのような意義があったのか、また氏子の者にとっての雪室の意義も考慮しなくてはならない。さらに行事と関係があるとされるのであれば、押合神事に関しての分析、検討も必要であろう。

堀一郎は保呂羽山の正月行事を報告している⁵⁾。その中の一部に「三日四日梵天奉納」とあり、これが押合神事にも該当する。秋田市赤沼の太平山三吉神社⁶⁾も例に挙げ、梵天奉納について記している。しかしながら、雪室についての記述は見当たらず、押合神事と雪室の関係は不明である。

萱場ふき子は保呂羽山波宇志別神社の梵天祭について報告している⁷⁾。地元の人が道者（参詣者）に対して中に簀を敷いた雪穴を売ったり、汁を売ったり、蠟燭の番をしたりなど各役割を決めて祭にあたったことを記している。聞き書きによる報告はあまりなかったため、貴重な記録であるが、文献との比較はされていない。

本稿では押合神事の雪室を研究対象とする。保呂羽山波宇志別神社の押合神事における雪室を研究対象とした理由は、第1に雪室は年初めの重要な行事の中で作製されたため、雪室にも重要な意義があった可能性が考えられること、第2は城下町や農村で製作される雪室は狭い地域の中であったが、押合神事の雪室に関わる者

は県南地方全域にわたっていたこと、第3に神事に見られる雪室は保呂羽山以外に類例が極めて少なく、その意味でも他の雪室との共通性や特殊性を解明する上で重要であること、第4に押合神事の雪室はこれまで本格的な研究がなされていないことが挙げられる。

押合神事の行事内容を江戸時代後期に記された文献と聞き取りによって大正時代から昭和初期の押合神事及び雪室を明らかにすることを試みる。押合神事や雪室の実態を解明することによって神事の中での雪室の意義を考察し、その変化も取り上げていくことにする。

2. 秋田県横手市大森町の概観

大森町は横手盆地西部に位置し、東部は水田地帯、西部は出羽山地に属し、豊富な森林源を有する。林野面積が町の総面積（102.19平方キロメートル）の半分を占めている⁸⁾。

大森町へはJR奥羽本線横手駅又は大曲駅で下車し、バスで大森町の中心地まで40分程の距離にある。保呂羽山波宇志別神社の里宮である八沢木村に行くには、さらに15分ほどバスに乗る。八沢木は山間地に位置する集落で、途中から坂道を登っていく。

大森町は天正年間（1573-1592）の頃、小野寺氏（横手城主）の支城地となり、藩政期には定期市が開設されていた。明治22（1889）年、町村制施行により、八沢木村、川西村が成立、近世以来の大森村は明治34（1906）年に町制をしいた。昭和30（1955）年、大森町と八沢木村が合併、同33（1958）年、由利郡大内村より上坂部が編入した。そして、平成17（2005）年、

4) 前掲3) 23頁。

5) 堀一郎「保呂羽山の正月行事」『民間伝承』第8巻10号、1943年、5-11頁。

6) 三吉神社の祭礼で歌われる道者歌は、本来は保呂羽山波宇志別神社で歌われていたものである（堀一郎「保呂羽山の正月行事」『民間伝承』第8巻10号、1943年、7頁）。

7) 萱場ふき子「秋田県の梵天祭」（岩崎敏夫編『東北民俗資料集（9）』萬葉堂書店、1980年、247-249頁）。

8) 平凡社資料センター編『秋田県の地名』平凡社、1980年、214頁及び齊藤健夫編『郷土資料事典—秋田県』株式会社ゼンリン、1998年、112頁。

大森町は横手市と合併し、現在に至っている。

大森町の人口は昭和25（1950）年、男5,993人、女6,109人、総人口12,102人で、昭和25年の人口がピークであった。その後は徐々に減っていき、平成12（2000）年には男3,792人、女4,311人、総人口8,103人まで減少した⁹⁾。その原因は生業形態が第1次産業から第2、3次産業へ移行していったからである。工場や商業施設が少ない地域では若者が就職できず、都市へ流出していっ

た。

昭和30（1955）年においては、ほとんどの者が第1次産業に従事しており、農林業を営んでいた。15歳以上の就業者を対象とした産業別就業人口の推移を見ると第1次産業4,223人、第2次産業304人、第3次産業872人であった¹⁰⁾。当時、多くの農家が専業農家であり、1,403戸数のうち895戸が専業農家であった¹¹⁾。それが平成12（2000）年には第1次産業744人、第2次産業1,424人、第3次産業1,867人と第1次産業は衰退していった¹²⁾。農家もほとんどが兼業であり、専業農家は86戸のみである¹³⁾。

3. 保呂羽山波宇志別神社について

保呂羽山波宇志別神社は大森町の西部旧八沢木村に鎮座する。八沢木村は櫛岡川、滝ノ沢川上流に位置する山村である。保呂羽山波宇志別神社は醍醐天皇の延喜5（905）年にできた延喜式神名帳に波宇志別神社の神の一柱として公認されている¹⁴⁾。里宮の社務所大友家で11月7

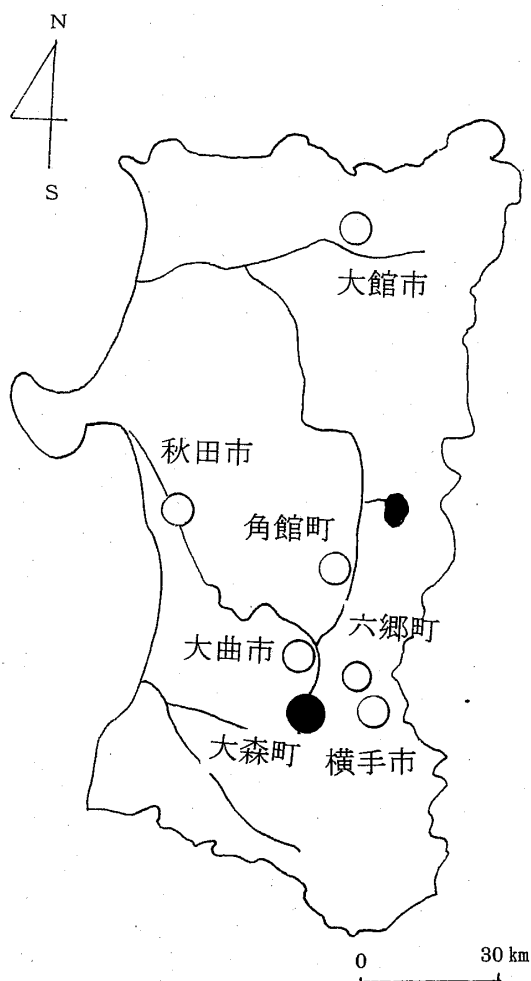


図1 大森町の位置

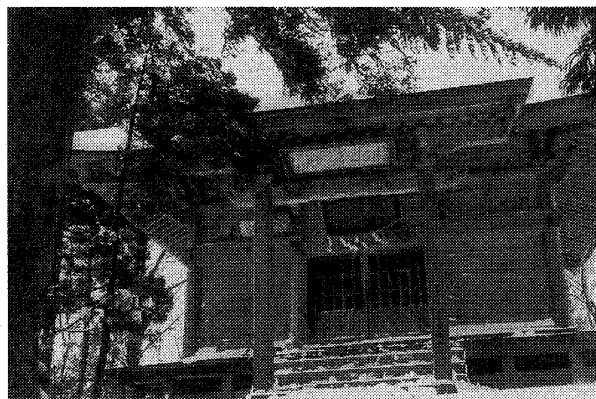


写真1 保呂羽山波宇志別神社
(2003年 御戸開祭 大友ヒサエ氏提供)

9) 大森町企画振興課『大森町町勢要覧資料編』1999年、2頁。

10) 前掲9) 6頁。

11) 前掲9) 7頁。

12) 前掲9) 6頁。

13) 前掲9) 7頁。

14) 波宇志別神社の神は農業神又は「別」という語か

ら地方豪族の首長を祭ったものと考えられている。波宇志別神社はもと波宇志別の神一柱を祭った社であったが、後代になってから、安閑天皇が祭られるようになったものと推定されている（大森町郷土史編さん委員会編『大森町郷土史』ぎょうせい、1981年、732頁）。

日に行われる霜月神楽は国の重要無形民俗文化財であるが、神楽は本来宮脇にある神楽殿で行われてきた。室町時代に建立された神楽殿は現在国指定の重要文化財になっている。神楽殿には三つの名称がある。神楽殿の他に弥勒堂と本宮の二つの名称が存在する。これは別当を勤めた大友、守屋家の両家の違いであり、大友家側の呼び名が弥勒堂、守屋家側からの名称が本宮である。

現在、神職は大友家だけであるが、幕末までは守屋家も神職であり、両家で神事を司っていた。守屋家が神職をとかれたのは嘉永6（1853）年のことであり、当時の神職は守屋勝貞であった。「守屋家家譜」に

嘉永六年正月三日居宅焼失、保呂羽山参詣止宿人百人余名焼死、藩主御判物宝物焼失したる不取締りの罪により、藩法律を以て庶民に下し、国境岩館に追放となるとある。「石井忠衛日記」にその火事の様子が記述されている。

嘉永六年正月四日の暁七ツ時、俗に五日堂と呼ばれる正月の神事の最中に、守屋の家の神前の蠟燭の火が紙梵天に燃えついて、忽ちのうちにちもえひろがり、座敷中は一面の火となつた。この部屋の天井は七分板を以て張つてあつた由であるが、それをも貫いて火は燃上り、屋根が落ち、折から千人近くの人が泊つてゐたが、その三四百人の人が居ながらにして無残の焼死を遂げ、尚多数の負傷者を出した。

嘉永6（1853）年正月3日守屋家の居宅が焼失した際には、恒例の神事に集まった止宿人多

数が焼死している。身元が判明した104人の人別内訳は、秋田・河辺・雄勝・仙北・平鹿の5郡2町34か村の社家・農民等に及んでいる¹⁵⁾。現在八沢木の繁名古館（城跡）の麓にその時の死者を埋葬した百人塚が立てられている¹⁶⁾。

保呂羽山波宇志別神社の社殿はよく火災にあっていた。「石井忠運¹⁷⁾日記」によると

宝暦十三（一七六三）年三月八日七つの時（午後四時）、坂部口から草焼きの野火が、折柄の烈風にあおられ、保呂羽山御本社御宮殿三間四尺四面及び鐘堂を全焼し、なお社木の大杉十二本、松雑木五本を焼失す（秋田県公文書館所蔵）

とある。安永3（1774）年の「石井忠運日記」11月16日条に「関伊衛門が保呂羽御ふしん御用掛被仰付」とあり、同年に再建に着手し、同6年に完成した。

この再建までの期間に9回も仮社殿を建替えたことが八沢木親郷肝煎角助文書に書かれている。「五右エ門日記」によると保呂羽山の押合神事の時に雪室を作る風習はこの仮社殿当時から始まったという¹⁸⁾。次項ではこの時に始まった雪室を中心に上げていく。

4. 押合神事と雪室

（1）江戸時代における押合神事と雪室

保呂羽山波宇志別神社の年中行事を記した文献記録は(1)保呂羽山御開山以来祭祀之次第、天正18（1590）年、(2)保呂羽山年中行事祭式之次第、享保9（1724）年、(3)三国社年中行事式、文化11（1814）年、(4)雪の出羽路 平鹿郡、文化11（1814）年、(5)六郡祭事記、年代不明が残

15) 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 秋田県』角川書店、1981年、882頁。

16) 保呂羽山波宇志別神社の前神職である大友ヒサエ氏（明治42年生）による。

17) 石井忠運は享保2（1717）年、大番入りしていた庄左衛門の嫡子として誕生し、享保14（1729）年13

歳で義峯公に出仕した。没年は明らかではない（新秋田叢書編集委員会編『第二期新秋田叢書（4）』歴史図書社、1973年、1-3頁）。

18) 大森町郷土史編さん委員会編『大森町郷土史』ぎょうせい、1981年、734頁。

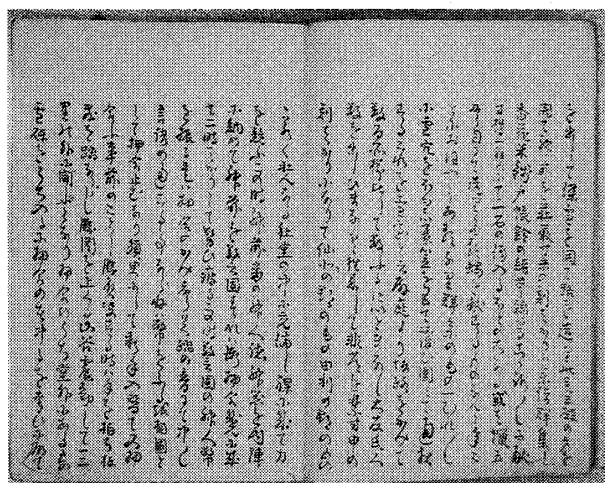


写真2 「六郡祭事記」『出羽国秋田領風俗問状答』
(秋田県公文書館所蔵)

存しており、とくに(4)には、前記の天正18年と享保9年の記録が書写されている¹⁹⁾。押合神事と雪室については(3)、(4)、(5)に詳しいが、本稿では(5)の「六郡祭事記」を中心に記し、必要に応じて他の文献によって補うことにする。

「保呂羽山御戸開押合神事」は1月4日、5日に行われる。この神事を「六郡祭事記」と「三国社年中行事式」では「世俗五日堂ト云」と記されているように、土地では五日堂と呼ばれていた。「六郡祭事記」に詳しく記録されているため、その史料を用いてみていく。この行事は「仙北の三郡のもの群参す」とあり、仙北郡、由利郡、平鹿郡の3郡の者たちが参加していた。押合神事が始まる数日前に「大友氏人数を出して、深雪を開けて路を造」った。「保呂羽山御戸開押合神事」の当日(4日)「此日、宮殿の戸を開て神前を荘厳」した。

19)「六郡祭事記」は秋田県公文書館所蔵本の『出羽国秋田領風俗問状答』に所収されており、本稿ではそれを底本とした。「三国社年中行事式」「石井忠衛日記」については『霜月神楽の研究』(本田安次『霜月神楽の研究』明善堂書店、1954年、70-71頁)を底本とした。菅江真澄の文化11(1814)年の記録は『菅江真澄全集』第6巻(内田武志、宮本常一編『菅江真澄全集』第6巻、未来社、1976年、144-145頁、153頁)を底本とした。

未刻になると神社に参拝者が参詣し、まず用意してきた奉納品を献上した。奉納した供物は「香花、米銭、戸帳、鈴の緒、苧、綿等」であった。酒や蠟に関しては「樽一隻にて一石の酒入るほどの大なる、或は蠟五貫目にて造りたる燭を献ずるものなど、年ころにおほようあるなり」とあり、相当な量を献上する者もいたようである。拝礼が終了すると御殿の前に雪室を作製し、一晚その中に籠るというが、雪室に関しては別個取り上げて後述する。

申の刻になると山頂の社殿の中に参拝者が押しかけた。

申の刻はかりになりて、仙北の郡のもの、由利の郡のもの若く壮んなる、社堂の中に充満し、裸に成て力を競ふ。この時、神前番の神人諸神器を内陣に納めて、神前を警固すれば、漸押合盛んに成て、二時はかりして勢ひ疲る。この時警固の神人幣を振る。是は押合のかけ声、足踏の音にて中々言語の通ずる事ならねば、幣をふるを相圖として押合止むなり。須臾にして、新手入替て、又押合ふ事、前のことし。勝負決する時は手を拍ち、板敷を踏みならし、勝鬨を上くる。山谷震動して一二里の外にも聞ゆとなり。押合のうち、堂外にあるもの雪礫をうち入るに、押合の者中るを幸ひに取て喰て渴を潤す。又、堂の屋上に三四尺も積れる雪、点滴と成て、雨のごとく下て、一夜のうちにみな消えはつるなり。押合にて、宮の内外に群衆するもの、雑言悪口心にまかせて放言するに、古例にて、互に無礼を咎めず。

要約すると申の刻、仙北郡の者と由利郡の者が社堂に入り、裸で競い合い、その一方で神前番である神人が諸神器を内陣に納めて神前を警護する。4時間ぐらいすると押合の掛け声や足音で言葉では通じないため、警固の神人は幣を振って終わりの合図をする。そして、また他の

者が入れ替わって同じ事を繰り返す。勝負が決まった時は手を打ち、板敷を踏み鳴らして、勝鬨の声をあげる。押合が終わると宮の内外で雑言悪口を言う。

やや寅の刻はかりに、神楽役の神人、神前を掃除し、始のこくとく荘厳し、神璽の大幣を正面に安置し、供物を辨備して、五日卯の刻、兩人とも二神前に進み、古来相傳授一人の秘法を行す。終て神楽役進み、大幣を取て、五調子の舞を舞ふ。

寅の刻に神楽役の神人、神前を掃除し、押合神事が始まる前のように、荘厳し、神璽の大幣を正面に安置して供物を供えた。五日の卯の刻になると次に神楽役が神璽の御大幣を持って五調子の舞を舞った。五調子の舞は「總て此山頂は鳴物を禁する故、鼓、笛なんとを用ゐず、舞はかり也。湯立、或は神楽等は山麓の末社弥勒堂と云にて行ふなり」とあり、山頂では鳴物が禁止であったため、舞だけであった。享保9(1724)年の「保呂羽山御開山以来祭祀之次第」には、この五拍子(五調子)の舞に注記して「但シ神前ハ楽器ノ類不用之、故ニ板ヲ叩キテ舞フナリ」とある。山頂での「保呂羽山御戸開押合神事」は神楽役の五調子の舞がすむと、御供を頂戴して終わった。湯立て、あるいは神楽等は山麓の末社弥勒堂で行われた。

「三国社年中行事式」には「六郡祭事記」には記されていない内容が記述されている。押合神事の激しい様子を「押合ノ半ニ雪ノ凝リタルヲ宮中ニ投スレバ、当ルヲ幸ニ待取テ觴ヲ凌ク、或ハ四方ノ八垂ヲ呑ムモノモアリ」と雪を口に含んで熱気に耐えていたと表現している。このような激しい行事では怪我をする者が多く警護の者がついた。社殿の中の様子については

宮中四方ニ注連縄アリ、左縄ニシテ五寸計リ隔テ、稿ノ本一尺計リ残シテ八下リノ幣ヲ付ル名付テ八垂ト云、押合ニ怪我アラン事ヲ

恐レテ禍ヲ遁レントテ謹テ呑ム、又押合盛ノ時髪ノ乱レテ眼口ヲ塞ク故ニ注連縄ノ端ヲ取テ結フニ数多ノ注連縄一時ニ盡ルナリ

社殿の中には注連縄を張り、押合の時に髪が乱れて、目が塞がれるのを防ぐために注連縄で髪を結う者もいた。

寅刻になると「神楽役神前ヲ清メ奉テ、神璽ノ御大幣ヲ出御成シ奉テ、御飭ノ間正面ニ安置シ奉テ、鏡餅三重、昆布、神酒二瓶ヲ供シ、退テ枳板南方ニ着座ス」(「三国社年中行事式」)と神楽役は神前を清めて神璽の御大幣を出して御飭の間正面に安置し、鏡餅三重、昆布、神酒二瓶を供え、退いて南方に着座した。

5日、卯刻の神楽の座については

神璽御大幣ヲ戴テ拝揖、祝詞勤行、終テ南方西柱本ニ着座スレバ、神楽役進テ、神璽ノ御大幣ヲ拝執シテ五調子ヲ舞フ、此時守屋氏南方東柱本ニ着座ス、又矢嶋領修験極楽寺ハ北方西柱本ニ着座ス、亀田領社人佐々木氏ハ北方東柱本ニ着座ス、次ニ御供頂戴シテ退下と座の位置がしるされており、大友氏は南方の西柱、守屋氏は南方東柱、矢嶋領修験極楽寺は北方西柱、亀田領社人佐々木氏は北方東柱に着座した。

押合神事の雪室は神事が始まる前に中に入って籠るものであった。「三国社年中行事式」に雪室の様子が記されている。

拝礼終テヨリ一群組合ヘ雪ヲ穿チテ穴ヲ堀リ、蓑笠ヲ覆ヒ室ノ如ク構ヘ〔世俗雪室ト云又雪穴トモ云フ〕終夜籠居ス、雪室ノ数庭上ヨリ御坂ヲカケテ数百ニ及フ大友氏人数ヲ出シテ非常ヲ禁ス(筆者注：〔 〕内は原割注)

雪室は神社に参拝した後に入ったもので、一般的には雪室または雪穴と呼んでいた。絵図が残されていないため、形は本文から推察すると雪穴を掘って上に藁や笠をかけて、屋根を作ったものである。「雪の出羽路 平鹿郡」にも雪

室についての記述がある。

かくて雪洞室とて、富士の石室^{イシムロ}の如く雪を切りて雪穴のひしへと有るに入ぬ。此雪竅^{アナ}を麓の者作りて一室をその価^{ホド}な^{カシ}にほどゝ、もともそが広狭^{ホド}らひ^{カシ}によって借ぬ。それにわらしきて、上は萱簀^{カヤス}だれといふをわたして屋根とし、おのれへが着つる蓑笠^{サケ}をも炭火^{アツモノ}をたきてあたり、また濁酒^{サケ}、吸物^{アツモノ}をあきなふ室あり。

麓の者が石室のように雪を切って雪室を作った。そこに藁を敷いて上に萱簀をわたして屋根とした。中で炭火にあたった。酒や吸物を麓の者から買って飲食する雪室もあった。

御殿前から坂にかけて数百ほどの雪室が作製されていたのである。この時に氏子が参拝者に雪室を作って藁や炭、酒などを売って収入を得ていた。これは木の根坂集落に残る慶応4(1869)年の「御山雪穴年番覚書」に次のように記されている。

浅舞衆

金三貫五百文 雪穴代 金二百文 藁小たば十把 金二貫百文 炭三俵代

横手衆

金十七貫百文 雪穴九つ代 百二貫七百文 炭四俵代 金三貫五百文 濁酒一斗代 百二貫百文 外品々

この史料から雪室の中に藁を敷いて中で炭を使って火を焚いていたことが窺える。また、「濁酒一斗代」とあるように、中で飲酒していたことも分かる。参拝者たちは、雪室の中で飲酒して一晩過ごし、押合神事に参加したのであった。雪室は神事の前に籠る場として、神事が開始されるまで待機する場であった。

(2) 大正末期から昭和初期にかけての押合神事と雪室²⁰⁾

押合神事は豊年を占う行事である。戦前は150本ほどの梵天が奉納されたが、戦争が激しくなると奉納する男の人が少なくなり、終戦後は30本ほどとなり、途絶えてしまった。その後は教育委員会が前田、中坊、坂部の青年会に籠代だけを出して、山頂に梵天を奉納するという形になった。押合神事には大曲、増田、川西など県南地方の信者から梵天奉納があった。

旧1月3日には本殿が鳴物禁止なので、梵天奉納の前に神楽殿で巫女舞が奉納された。

旧1月4日は宮司や神官達で本殿の飾付をし、神饌が供えられて祭典が行われた後に梵天奉納者が我先にと押し上げた。押合神事に参加する者は里宮でお祓いをしてもらった。その後、法螺貝を吹きながら梵天を担いで山頂を目指した。その者達を道者と呼んだ。鳥居坂を通して本木、前田、上八沢木、屋布台を通り、山頂の本殿へと登って行った。その途中、道者は前田などの集落の家に泊まった。その後、御殿の前に作製してある雪室の中に入り、押合神事が始まるのを待った。

雪室は氏子が作ったもので、雪室代を道者からもらっていた。雪室は雪を積み上げて円形の形に作り、上に板をわたして火を焚いても崩れない形であった。中には七輪を置いた。雪室は5、6人ぐらい入れる大きさであった²¹⁾。氏子がドブ洛克を持って道者に売った。当時は夏、田を耕し、冬は炭焼きなどをして稼いでいたので、押合神事の際の道者から得る収入は貴重なものであった。このお金は氏子の収入となった。「道者道者お金撒け」といったほどであった。

20) 大正時代から昭和初期に大友武三郎氏が古い記録を写した「県社波宇志別神社年中行事」が大友ヒサエ氏宅に所蔵されている。

21) 押合神事の時に得た金は各家で記していたそうだが、現在史料はほとんど残されていない。明治時代の記録が『大森町郷土史』に記されている(大森町郷土史編さん委員会編『大森町郷土史』ぎょうせい、1981年、735頁)。

雪室の中では飲食をしたり、賭け事をしたりした。雪室は押合神事終了後、雪が解けるまでそのまま放置しておいた。

旧1月5日、祭典が終わると(祝詞をあげる)雪室の中で待機していた道者達がいっせいに御殿の前で梵天を押しあって、本殿の中に入ろうとした。神社の総代の人が、参拝者が怪我をしないように立ち会った。先に本殿の中に梵天を奉納したほうがその年、豊作になると言われていた。梵天奉納が終わると大友氏が五調子の舞を舞った。山頂では鳴り物が禁止なので、錫杖で拍子をとって舞った。梵天は払い下げられ、次の梵天を奉納する神社へ持って行った。また梵天で着物を作って赤ちゃんに着せると丈夫になると言われた²²⁾。

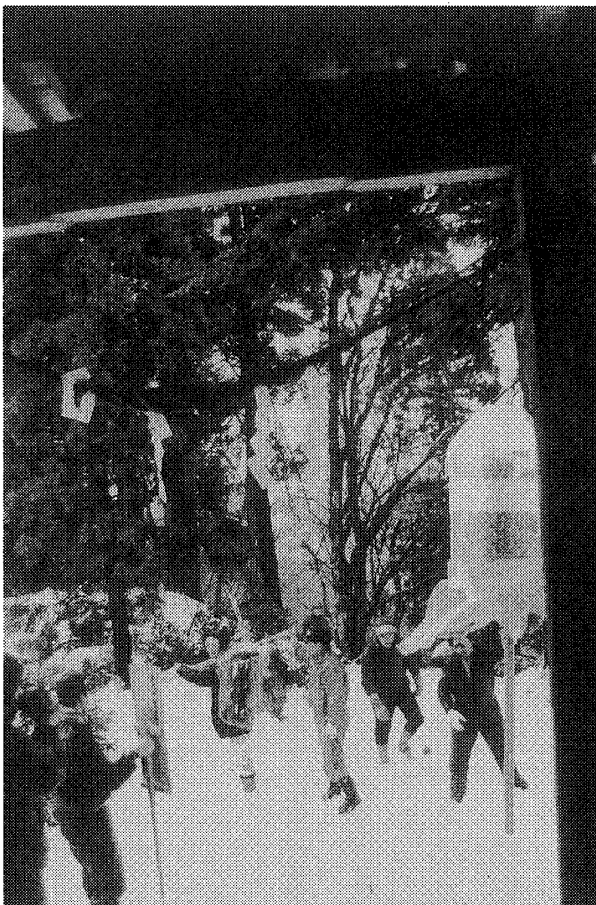


写真3 梵天祭り
(大友ヒサエ氏提供)

5. 押合神事と雪室の特色と変化

(1) 押合神事の特色と変化

押合神事は作物の豊凶を占う神事であり、年の初めに行われる重要な行事である。押合神事は県南の多数の者が参加した。保呂羽山波宇志別神社の山頂の宮に先に梵天を奉納したところが、豊作になると伝えられていたので、皆必死になって我先に入ろうとした。既述してきたように、保呂羽山波宇志別神社内が熱気に包まれる様子は押合神事がそれほどまでに真剣に行われる神事であったことを物語っている。

「御戸開神事」の本質は10月に行われる「御戸閉神事」とあわせて考えると見えてくる。御戸閉神事に関して享保9年の「保呂羽山年中行事式之次第(雪の出羽路 平鹿郡)」に次のように記されている。

四日ノ夜参籠、御神ミトサン殿御戸閉ノ神事也。早旦献御供、神酒祓修行大友氏勤之〔俗ニ云、此日尊神京都へ飛行シ玉ヒ禁裏ヲ守護シ御座(オマシマシ)テ正月五日ニ至リ還御成玉フト云リ。是故ニ里人御暇乞也トテ、思々ニ捧物ナドシテ四日ノ夜ハ奉通夜ナリ〕(筆者注：〔 〕内は原割注)

御戸閉神事は神が京都へ赴くための神送りの儀であった。それに対して、御戸開は京都から帰ってきた神を迎える重要な儀であった。その神様に梵天を奉納するのが押合神事を行う重要な目的であったのである。換言すれば押合神事は神を迎えて梵天を奉納するための大切な行事であり、それが「保呂羽山御戸開押合神事」の本質であったと推測される。これほどまでに御戸開押合神事が盛大に開催された背景は神を迎える大切な行事であったからであろう。しかしながら、第2次世界大戦後、御戸開押合神事は梵天奉納するのみになり、規模が小さくなって

22) 大友ヒサエ氏(明治42年生)の話による。

しまった。その理由として考えられるのが他の神事は氏子が行っているが、押合神事は遠方のものが梵天を奉納するというように、不特定多数の者が参加しており、信仰基盤は弱いことがまず挙げられる。また参詣する若者たちは戦時中、戦争にとられ、行事の担い手たちがいなくなったことも理由と考えられるが、第2次世界大戦後、第1次産業から第2、3次産業へ移行し若者が都会へ流出してしまったことが最大の原因であると推察される。

(2) 雪室の特色と変化

押合神事の雪室は、雪室又は雪穴と呼ばれていた。この雪室には道者（参拝者）側と氏子側では持つ意義が異なっていた。道者達は雪室の中に籠り、飲食などをして、押合神事が始まるのを待った。押合神事が始まると雪室から飛び出し、梵天を他の者より先に奉納しようとした。つまり、道者達にとって雪室は神事の前に籠るための場であった。

秋田県内では江戸時代において城下町（内町）、農村で雪室が作製されていた。城下町における雪室は「雪城」と呼ばれ雪城型であった。雪室には旗や繭玉などを飾りつけ、中には俵や茅などを積めた。ここで関連する行事はカマクラであった。雪室の中に積んである俵や茅などを焼き、そこから手に持っている俵に火をつけ、体の周囲を回すという火振りを行っていた²³⁾。一方、農村では「鳥追い小屋」と呼ばれる雪室を作製し、鳥追い行事が開始されるまで一晩中籠っていた。この2つの雪室を比較してみると後者の雪室の方が押合神事の雪室に類似している。名称の違いはあるが、形が長時間火を焚いても通気性がよく、一酸化酸素中毒にならない小屋

型であるし、利用形態の面においても行事の前に籠るという点から共通性を有している。それは鳥追い行事も押合神事も豊作祈願の行事であり、参加者が両方とも農民であったからであろう。また、鳥追い行事も神事も行う前に籠るという行為を伴うことから、両方とも籠るのに適した形や利用形態になっていると考えられる。このように、参拝者にとっての雪室は生業である農業に関わる重要な神事の前に籠るための小屋としての役割を果たしていたと推測される。

農村で作製される雪室と形、利用形態の面で共通性が見られるが、保呂羽山の押合神事の時に作られる雪室のみが有する特殊性がある。農村で作られる雪室は行事の担い手である者が作り、利用していた。一方、保呂羽山の押合神事の雪室は製作者（氏子）と利用者（参詣者）が別であった。すなわち、この雪室は製作者と利用者の供給と需要の関係で成り立っていたのである。以上の特色は保呂羽山の押合神事の雪室だけしか見られないものであった。

次に氏子側から見た雪室は籠りのためのものではなく、貴重な収入源であった。当時の八沢木村の生業は周知のように山地の多い地形からほとんどが山に従事する仕事であった。現金収入が少なく、この雪室で稼ぐ金は重要であった。そのため、雪室を作る場所の争いもたびたび起こったという。また道者が中で飲食するための酒や食べ物も売っており、雪室の中で行うことは氏子側の収入にも関係していた。中で火を焚く原料である炭なども売っていた。氏子側からしてみれば、雪室は材料が雪であったため、費用もかからず、片付けるにも困らない便利なものであったのである。そして、それは現金収入の少ない集落の人にとって雪室は生活の糧であった。

江戸時代と昭和初期を比較すると雪室に泊まるということとはなくなり、始まる前に一時的に

23) 後藤麻衣子「江戸時代後期の雪室とカマクラ行事—久保田城下を事例として—」『日本民俗学』第246号、2006年、69—85頁。

いる場所となっており、簡略化されたのである。第2次世界大戦後押合神事が形だけになった時にはすでに雪室は作られていなかった。行事の担い手である周辺地区の若者が減少すると神事の前に籠るということはなくなり、ただ形式だけ行うようになったのである。また交通の便もよくなり、泊まる必要もなくなったのもその原因であったと考えられる。生業形態の変化が押合神事に影響を与え、さらに押合神事の中で作製されていた雪室も変化していったのである。

6. おわりに

これまで、大森町保呂羽山波宇志別神社の押合神事を雪室とともに取り上げ、実態を解明した研究はなかった。本稿では押合神事や雪室の実態を解明することによって神事の中での雪室の意義を考察し、さらに押合神事と雪室の変化も明らかにしてきた。

まず、保呂羽山波宇志別神社が鎮座する大森町の概観を捉えた。大森町の東部には水田地帯、西部には山間地帯であり、昭和初期までは第1次産業である農林業が生業の中心であった。第2、3次産業へと移行し、農林業が衰退した。企業や商業施設の少ない大森町では若者が都会に流出し、人口がかなり減少した。

保呂羽山波宇志別神社の祭神は安閑天皇であった。保呂羽山波宇志別神社の神職は江戸時代末まで大友氏と守屋氏の両氏が司っていたが、1月3日に押合神事の前に守屋家で起った大火災を原因に職をとかれ、現在では大友氏のみである。保呂羽山波宇志別神社はたびたび火災にあい、宝暦13(1763)年に社殿が焼失し、安永6(1777)年に再建された。その間に押合神事の際に雪室を作るようになったという。

そして、江戸時代と大正時代から昭和初期における雪室の実態を文献と聞き書きによって明らかにしていった。押合神事は神を迎え、梵天

を奉納し、作物の豊凶を占う年初めに行われる重要な行事で秋田県南の人を中心に多くの者が他地域の人より先に梵天を奉納しようと押合神事に参加した。3日に里宮で神楽が奉納された。4日は大友氏が山頂の神社まで行き、御戸開をして供物を供えた。押合神事に参加する者は神酒などを献上した。その後、江戸時代においては雪室の中に一晚中籠り、中で飲食をした。大正時代、昭和初期では参詣に行く途中の家に宿泊した後、雪室の中に入って、押合神事が始まるのを待った。

押合神事が始まると参拝者が梵天を担いで神社の中に先に入ろうとして押合った。先に入った方の地域が豊作になると言われているので、神社内が熱気で包まれるほど真剣に行われていたという。

雪室は押合神事が開始されるまで籠る場所であった。雪室は雪穴又は雪室と呼ばれた。その中で飲食をしたり、賭け事をしたりした。この雪室は氏子の者が作製し、道者に売りつけていた。また雪室だけではなく、炭や藁や飲食物なども売っており、当時の氏子達にとっては貴重な現金収入であったのである。

以上のように、江戸時代、大正時代から昭和初期の押合神事と雪室について明らかにしてきた。そこで、押合神事と雪室の特色と変化について考察を深めた。押合神事は秋田県南地方の多数の者が参加する行事であり、行事の状況を記した文献や聞き書きから参拝者がかなり真剣に取り組んでいたことが窺える。御戸開押合神事は神を迎え、神に梵天を奉納する重要な神事であった。これほどまでに盛大に行われていた理由は当時の生業が農業であったからと推測される。農業中心の生業形態であったからこそ、豊凶を占う行事は重要であった。そのため、押合神事は農家の者にとって意味のある行事であったと推察される。

しかしながら、第2次世界大戦後、第1次産業から第2、3次産業へ移行すると、押合神事の規模は小さくなっていった。押合神事が行われる目的—豊凶を占うこと—が農業社会でなくなってしまったのである。それが衰退の主要な要因であったと思われる。

押合神事の雪室は道者（参拝者）側にとっては、神事の前に籠るための場であり、氏子側にとっては貴重な収入源となっていた。雪室の製作者（氏子）と利用者（参詣者）が異なることは農村で作製される雪室には見られない特徴である。雪室は製作者と利用者の供給と需要との関係で成り立っていた。この関係が、当初からのものであったのか、あるいは始めは参詣者が雪室を作って、後に氏子はその地の利を生かして雪室作りを代行するようになったのかは今後明確にしていきたい。秋田県内では江戸時代において城下町（内町）と農村で雪室を作製していた。その両者の雪室と押合神事の時に作られる雪室を比較すると後者の農村で作製される雪室に類似していた。小屋型の雪室を作り、その中で行事が始まるまで籠っていた。押合神事の雪室と鳥追い行事の時に作製される雪室が類似している理由は、鳥追いも押合行事も豊作祈願の行事であり、参加者両方とも農民であったからではないかと推測される。

第2次世界大戦後、前述したように押合神事が形だけになっていくと雪室も作られなくなっ

た。豊凶を占う大切な行事であるという認識がなくなっていくと神事の前に籠る必要もなくなったのである。また交通の便もよくなり、泊まらなくても良くなったことも原因の一つである。このように生業の変化が押合神事に影響を与え、それに伴い、押合神事も中で作製される雪室も変化していったのである。

本稿では押合神事とその時に作製される雪室の特色と変化について明らかにしてきた。主に神事の内容や雪室の利用方法を中心に述べてきたが、この雪室をめぐる事件がおこった。秋田県立博物館に所蔵されている守屋家文書の中には雪室をめぐる争論などが記されている。その史料の分析に取り組み、押合神事と雪室の特色をさらに明確にしていくことが今後の課題である。

付記

本稿は昭和女子大学渡辺伸夫先生、田畑久夫先生のご指導のもとに作成致しました。また、後藤淑先生、大谷津早苗先生にご教示賜りました。さらに、資料収集にあたり、多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

秋田県公文書館（後藤富貴氏）、秋田県立博物館（新堀道生氏）、保呂羽山波宇志別神社（大友ヒサエ氏）、横手市教育委員会（佐藤庄一氏）

（ごとう まいこ 生活機構学専攻3年）

受理年月日 平成18年9月30日
審査終了日 平成18年12月7日